

2002年のマレーシア研究 サバ・サラワクから

山本博之

サバ・サラワクを対象とした研究を「民族と統合」「環境と人間」の2つに分けて、関連する研究とあわせて紹介する。

1. 民族と統合

民族や国民をめぐる議論がしばしばかみ合わないのは、民族や国民を「集団的な自他の区別」と結びつけて捉えるか、それとも「人々が自分たちの望むあり方を表明する営み」と結びつけて捉えるかという立場の違いがあるためだろう。「国民は近代以前にもあった」「アンダーソンの議論は近代以前にも適用できる」といった議論は、後者の立場を前提としてこそ有意義な議論となるはずである。そこで、ここでは民族や国民を後者の立場で扱うよう努めることにする。

なお、吉野耕作「エスニズムとマルチエスニシティ」は、マレー人を事例として、近代以前のネイションに対する2つの立場の統合を試みている。吉野によれば、マレー人は近代的なネイションとして形成されたが、その時点で遡って近代以前のマレー人概念が構築されたとされる。

*

自分たちのあり方を表明するという「自己の語り」では、誰に向けて語るかが重要である。濱四津菊江「Islam and Nation Building in Southeast Asia」は、マレーシアは国民形成のアピールを外部社会に対して行う「外向き」社会であり、そのため国内のムスリムと非ムスリムの協

力を可能にしたが、インドネシアは国民形成のアピールを内部に対して行う「内向き」社会であり、国内のムスリムと非ムスリムの対立を招く結果となったと図式化している。また、山本博之「英領北ボルネオ(サバ)における収穫祭の成立」も関連した議論を試みている。

このことに関連して、石川登「国家の歴史と村びとの記憶」は、テロック・ムラノーで1963年に起こった殺人事件に関して、(1)マレーシア結成をめぐる国家間の対立に巻き込まれた、(2)インドネシア人労働者を迫害してきた人々が報復を受けた、とする2つの異なる語りが存在することを明らかにした上で、「自己の語り」が複数ありうることに注意を喚起している。

また、「自己の語り」に関連して、都丸潤子「先住民」と移民政策」は、MCAが華人の代表を自任するゆえにMCA内部の(ひいてはマレーシア華人の)多様性という現実を受け入れざるを得ないという興味深い指摘を行っている。

(1) 非主流派による「自己の語り」

社会の非主流派であると自覚している人々にとって、自己アイデンティティを唱えることは、社会全体における正当な一員であると主張するという意味も持ちうる。奥村みさ「マレーシア・カトリック教会におけるポスト・コロニアリズム」は、マレーシアのカトリック・コミュニティが聖画にマレー文化の要素を取り入れ、他方で典礼に自民族の伝

統文化を盛り込んでいることから、「マレーシアのカトリック」としての正統性を表明しようとしていると読みとる。また、山本博之「英領北ボルネオ(サバ)におけるバジャウ人アイデンティティの形成」も類似の議論を試みている。

なお、バジャウ人に関しては、上田達「バジャウ・ラウトに関する人類学的研究の課題と展望」が、スルー王国時代は個人の権勢によって、現代のサバではマレーシアの市民権を持つことによってパトロンがパトロンたり得るといふ差があり、移動性が高いバジャウ人といえども国家の介在を無視して語ることはできないと論じている。サバから国境を越えてバジャウ人を見るならば、青山和佳「ダバオ市におけるバジャウの不平等化」、同「フィリピン・ダバオ市におけるバジャウの生活条件」は、フィリピンのダバオ市のバジャウ人を対象に調査を行い、バジャウ人の間で(1)非漁業を中心とする高所得の経済活動、(2)外部機関から援助を受けていること、(3)キリスト教に改宗していること、の3点によって社会的地位が高いと判断されることなどを明らかにしている。また、三王昌代「東アジア交流史のなかの蘇祿(スールー)」は、バジャウ人ではないが、15世紀にスルーから中国に渡ったパドゥカの墓守として今も中国で暮らす子孫を紹介している。

*

民族が立ち上がる際に媒介役となる人物がもつ特徴を検討したものとして、内堀基光「民族の運動態における平凡の意味」は、独立を前にサラワクの各民族集団が互いに相手を意識しつつ政党結成に向かった中で、ラジャン河の多民族状況の中で育った経験を持つイバン人のジュガが担った役割を考察している。また、山本博之

「“Foreigners’ Nationalism” in Malaysia」も関連した議論を試みている。

西井涼子「硬直する身体」は、仏教とイスラム教の間で何度でも改宗が可能な南タイにおいて、改宗者が両者の媒介役となっていること、しかし死後にはその死体をめぐって仏教徒とムスリムの亀裂を招きうることから、生者が宗教にしたがって死者のために徳を積むという社会において、人は死によって異教徒に「触る」ことのできない存在になってしまうとの認識を導いている。

なお、ブルネイのクダヤン人を調査した清水芳見「マレー・ムスリムの死生観」も、生者が死者の善行を増やすための儀礼を観察している。ただし清水によれば、仏教の「追善」に似たこのような考え方はイスラム神学には存在せず、調査村の民間信仰であると考えられる。また、「死」に関して、上蘭恒太郎「連想調査によるドイツ、マレーシア、日本の死の意識比較」は、日本、マレーシア、ブルネイでの調査結果の中に、死に対して何よりも感情によって応答するというアジア人の共通性を見出そうとしている。

(2)主流派による「自己の語り」

社会の主流派には、自らの文化的属性に関し、社会内の他者と自分を区別する指標と見るか、それとも他者を取り込むための指標と見るかという選択がありうる。井口由布「「主体」形成とマレー語の位置」は、マラヤにおける民族(国民)意識の形成とそこにおけるマレー語の捉えられ方を検討した。アブドゥッラーは血縁ではなく共通語としてのマレー語による共同体形成を唱えたのに対し、ザッパ(ザアバ)は母語としてのマレー語による共同体形成を唱え、さらに ASAS50 は「複

合社会」状況を乗り越えるためにリンガ・フランカとしてマレー語を捉えようとしたと論じている。

*

マレー人は西洋近代をどう扱おうとしてきたのか。吉田好孝「美しい橋には王妃の名前がふさわしい」はマレーシアの有名な橋をいくつか挙げ、それぞれの形状がイスラム教の影響を受けたマレー王家の象徴などに起源を持ち、それらが現代の新技术と調和している様子を紹介している。

これに対して奥村みさ「民族衣装にみるマレー文化の新伝統主義」は、マレー語女性誌の誌面を分析して、マレー文化が西洋文化に匹敵しうるとの主張を読み取る。その上で、これらの女性誌がマレー人女性の自由度を高めた側面を持つ一方で、現実社会に住むマレー人女性を縛る側面もあることを指摘している。

福田隆眞・佐々木宰「マレーシアにおける美術教育の鑑賞について」は、美術の鑑賞教育の方法としては西欧の概念を受け入れているが、その対象となる鑑賞作品に伝統的な工芸など幅広いものを含めることで自文化の認識をはかろうとしていると指摘している。

マレーシア人が英語志向を持つことについて、吉野耕作「英語化」とポストコロニアルなアジア」は、高等教育の英語化が高等教育におけるエスニックな棲み分けを促進する危険性があり、また、英語化が大陸の中国人とマレーシア華人のつながりを促進していると指摘している。このように英語化がマレーシア社会の民族的な亀裂を強めようとする吉野に対し、杉本均「マレーシア：グローバル化する複合社会の公立学校」は、(1)ビジョン・スクールによる小学校の統合と、(2)私立大学を認めることによる大学での英語教育の強化とい

う一見矛盾する2つの方向性について、グローバル化に対応しようとする動きと見ることで統一的な説明を試みている。高等教育の英語化についても、杉本均「マレーシアの大学教育におけるグローバリゼーションとコアカリキュラム」は、マレーシアで英語が持つ英国植民地統治のマイナスイメージがほぼ払拭されたと見ている。

*

マレー人のムスリムとしての側面に目を向けるならば、中村正志「対米テロとアフガニスタン空爆のマレーシア政治への影響」は、同じムスリム主体の政党であっても、穏健派のUMNOは他民族との連合に成功し、他方で急進派のPASが他民族の支持を失ったと整理する。これに対し、中田考「マレー世界とイスラム地域研究」はこの主張に正面から挑んでいる。中田は、他のイスラム諸国と比較した上で、マレーシアでは反人定法論に立つPASが政党活動を認められているために人定法である憲法の体制内でイスラム運動が共存可能となっているとして、PASが演じている役割の重要性を訴えている。その上で、PAS一般党員の誤読による暴走を防ぐためにも、イスラム教をめぐる言論の自由をさらに拡大する必要があるとする。

2. 環境と人間

村上公久「熱帯林消失の現状と保全対策」はSAFODAの事例を取り上げ、サバにおける森林保全戦略としてのアカシア造林の見通しを述べている。これに対して石弘之「木材とヤシ油が破壊するボルネオ島」は、熱帯林が破壊されている面を強調し、その原因として、商業的な木材伐採に加え、1960年代末から急に拡大した油ヤシの

プランテーションを挙げている。

油ヤシは様々な角度から研究されている。白井義人「マレーシアパームオイル産業ゼロエミッションとグリーンエネルギーの供給」によれば、パームオイル産業はエネルギー的には余裕のある産業であり、白井の試算によれば、精製の過程で排出される廃棄物を利用した発電によってマレーシアの各家庭に電力を供給することが可能である。これに対し、山下晋司「エコツーリズムの政治経済学」は、ポートでキナバタンガン川沿いの動植物を観察するエコツアーは、油ヤシのプランテーション開拓によって動物が川沿いに残されたわずかな土地に追い込まれ、それによって成り立っていると皮肉な実態を指摘している。

また、永田淳嗣「開発と環境」をめぐる新たな文脈」が指摘するように、ハジ基金などマレーシアの政府系企業・組織がインドネシアの農業部門に進出して油ヤシ・プランテーションを経営しており、油ヤシは煙害とともに国境を越えた問題となりうる性格を持っている。

周辺国への産業の移転は油ヤシに限らない。例えば藤崎成昭「マレーシアの環境問題と規制動向」は、近年マレーシアが天然ゴムとその関連産業をベトナムなど周辺国に意図的に移転していることを踏まえ、公害防止対策を含めた産業移転の必要性を訴えている。

これに関連して廃棄物処理の民営化については、渡辺泰介・宮崎清隆「マレーシアにおける有害廃棄物管理」は 1998 年に稼働を開始した有害廃棄物の処理施設に関し、処理コストがかかりすぎるなどの問題点を指摘している。

柳雄「マレーシアにおける下水道事業民営化と国営化」は、1993 年にマレーシアが世界に先

駆けて下水道を単独で民営化し、後に経営破綻によって 2000 年に国営化された IWK について、60%に留まっている料金徴収率を引き上げる必要を指摘する。なお、下水道事業の民営化についてはモハマド・リドゥアン・イスマイル「マレーシアにおける下水道事業の民営化の経験」においても背景が説明されている。

青木裕子「マレーシアにおける地域的ごみ管理システム」は、1994 年末にマレーシアでごみ管理システムが民営化されたことに関し、ペナン州とセランゴール州の事例を比較し、ペナンでは民営化依存、セランゴールでは州政府主導という違いがあると指摘している。

食糧生産に目を向けると、石田章「マレーシア：食糧増産への方針転換とその背景」は、穀類自給率が日本よりも低いマレーシアにあって、1990 年代末には経済危機を契機として食糧増産に政策が転換されたこと、それに当たってサバ・サラワクで食料生産における企業経営の導入が検討されていることを明らかにしている。

藤本彰三・宮浦理恵「マレーシア・サバ州高地における野菜栽培の技術と経営」は、サバで野菜の産地として知られるクダサンで調査を行い、同地の野菜栽培においては畑面積の拡大よりも灌漑改良や降雨対策が、そして農薬への過剰依存よりも雨よけ栽培や輪作体系の確立が必要であると結論付けている。また、永井鞆江「東マレーシア・サラワク州における食糧・栄養事情について」も、サラワク州の先住民を中心に食糧事情を幅広く紹介し、先住民社会の直面する食糧・栄養の問題を指摘している。